

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A study on the Usage of “e” and “ni” in novels “Botchan” and “Gan”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 霧岡, 昭夫, TSURUOKA, Akio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001304

漱石『坊っちゃん』と鷗外『雁』における 助詞「へ」と「に」の比較

鶴岡 昭夫

1. はじめに

国立国語研究所言語計量研究部の第一研究室と第三研究室との共同研究として行われてきた「漱石・鷗外の使用研究」の成果は、これまでいろいろの所で折にふれて公にされている。研究期間はいちおう終了しているが、そこで蓄積されたデータは適宜利用されているほか、期間中に行われた調査のうちで、発表の機会のなかったものや期間の終了後にさらに発展した研究がいくつかある。そのようなものの一つである助詞量の調査で、表1のような結果が出た。

この表から、『坊っちゃん』(注1)と『雁』(注2)とでは、「へ」と「に」以外のおもな助詞は、総語数に対する使用率がほぼ等しい、言い換えると「へ」と「に」の量が『坊っちゃん』と『雁』とではかなり違っている、ということがわかる。すなわち、漱石の『坊っちゃん』のほうが『雁』よりも「へ」の割合が高く、反面「に」の割合が低いのである。

このことは、さきに筆者が『近代文章における「に」と「へ」の地域差』(中田祝夫博士功績記念論文集 1979.2)で、動詞「行く」「来る」だけに関してではあるが明らかにしたところの、近代(明治以降)にも北九州地域を中心とする「～に行く・来る」圏と、京阪・関東を中心とした「～へ行く・来る」圏との対立・並存が見られること、および森鷗外(石見国津和野=現在の島根県西部の出身)には「に」を多く用いる、すなわち北九州的傾向がやや見られ、夏目漱石(江戸牛込=現在の東京都新宿区の出身)は「へ」を多く用いるということと関係がありそうである。

そこで、「行く」「来る」に限らず、ほかの動詞すべてについて調査をした結果がこの小稿である。標題のように『坊っちゃん』と『雁』の二作にし

ぼったのは、時間的、労力的な制約からである。したがって本稿では、かなり結果が明確に出ているが、この分量だけから全体を推し測るのは危険である。本稿の目ざすところは、この分析結果そのものよりも、将来この二人の作家の、またいろいろな作家の多くの作品について行う計量的研究の試験的研究（ポーリング調査のようなもの）を行うことである。

(注1) 明治39年(1906年)4月発表。底本は岩波書店『漱石全集第二巻(短篇小説集)』(昭和41年1月刊行)

(注2) 大正4年(1915年)5月発表。底本は岩波書店『鷗外全集第五巻』(昭和26年6月刊行)

	坊っちゃん	雁
総語数	51,078 S単位	44,707 S単位
に	28.5 (1,457)	40.5 (1,810)
へ	9.0 (458)	5.0 (225)
は	33.7 (1,720)	37.7 (1,684)
が	25.9 (1,322)	25.8 (1,151)
を	32.3 (1,651)	40.1 (1,791)
も	10.9 (554)	11.1 (494)
から	5.5 (280)	4.9 (217)
まで	2.1 (106)	2.2 (100)

〔表1〕 主要助詞の総語数に対する比率(%) カッコ内は総数

2. 方法

まず、両作品で「…へ～」「…に～」の形で用いられている動詞の全用例を集めカード化した。動詞には、名詞にサ変動詞のついたものも全体で一語とし

て含め、サ変動詞の語幹だけの動詞的な用法もサ変動詞に含めた（例えば「これへ（に）頂戴」などの「頂戴」を「…へ（に）頂戴する」に入れる）。また、名詞に転成した「…へ（に）帰りがけに」なども「帰る」の中に入れた。動詞2語からなる複合動詞については、今回は原則として前部分を優先させ、「…へ（に）」の部分が前部分にしかかからない場合はむしろのこと、前部分にも後部分にもかかる場合も前部分でとって、例えば「…へ（に）移し入れる」は「…へ（に）移す」で、また「…へ（に）出てくる」は「…へ（に）出る」とすることにした。しかし「…へ（に）」が後部分にしかかれないものは後部分で、また「…へ（に）」が前部分にも後部分にもかかれず、複合動詞全体にかかるとしか考えられないものは全体を1語としてカード化した。なお、明らかに「…へ」「…に」の一方での用法しかないもの、例えば「…への行き方」「…に有る」「…に育つ」などの語は除外した。こうして集めたのは『坊っちゃん』の「…へ」をうけるもの異なりで170語、述べて453語、「…に」をうけるもの異なりで174語、述べて307語、『雁』では「…へ」をうけるもの異なりで90語、述べて222語、「……に」をうけるもの異なりで283語、述べて504語であった。

次に、その動詞を、それぞれの山（各作品別に「…へ」「…に」の山があるから、4つの山ができる）の中で、五十音順に配列しておき、先頭から、2つ以上の山に現れる動詞だけを抜き出し、その見出し、分類（作品名、「…へ」または「…に」の各用例数など）を書き込んだ2次カードを作った。そしてこれをもとに分析を行った。すなわち以下の分析には上の4つの山のうち2つ以上に共通して用いられているものだけについて行ってあるが、それは客観的な比較が目的だからである。

3. 分析

『坊っちゃん』にも『雁』にも「…へ」「…に」の両形をうけて用いられている語は表2の14語であった（「いく」と「ゆく」は一応別語とした）。

この表をみてわかることは、『坊っちゃん』で「…に」をうけるほうが優勢なものは「言う」と「立つ」の2語だけであるのに対して、『雁』ではそれが

		言 う	行 く	入 れ る	来 る	掛 け る	座 る	立 つ	出 る	は い る	ま わ る	持 つ	遣 る	行 く	渡 す	計
坊っちゃん	へ	2	30	11	37	6	3	3	40	33	7	6	4	30	1	213
	に	7	2	4	1	1	3	6	1	8	3	1	1	5	1	44
雁	へ	1	21	1	16	5	1	1	18	9	1	3	2	17	1	97
	に	16	3	13	10	13	10	15	12	14	1	1	5	3	4	120

〔表2〕

「言う」「入れる」「掛ける」「すわる」「立つ」「はいる」「遣る」「渡す」の8語（全体14語の過半数）になっていること、両作品ともに「…へ」をうけるほうが多いものの中に、「出る」「来る」などのように、『坊っちゃん』では圧倒的に「…へ」をうけているのに『雁』では「…に」をうけるものが多いことがあること、そしてその結果、合計で『坊っちゃん』のほうは圧倒的（約5対1）に「…へ」をうけるのが多いのに対して『雁』では「…に」をうけるほうがやや多く、逆転がみられるということ、などが言える。

次に、『坊っちゃん』『雁』のどちらか一方だけ「…へ」「…に」が用いられていて、他方には「…へ」「…に」のいずれかだけが用いられている動詞は次の表3のとおりである。

この表では、『坊っちゃん』のほうで「へ」を専用とし『雁』が「へ」「に」を用いるのが8語あるのに対して、『雁』で「へ」専用、『坊っちゃん』で「へ」「に」を用いるのは2語しかないこと、その逆に『坊っちゃん』で「に」専用、『雁』で「へ」「に」を用いるのが4例しかないのに『雁』で「に」専用、『坊っちゃん』で「へ」「に」を用いるのが10例もあることがわかる。また、『坊っちゃん』で「へ」専用の動詞は『雁』でも「通う」「出す」を除くと「へ」が多いこと、また『雁』で「に」専用の動詞は、『坊っちゃん』では「付く」「止まる」「寝る」「乗る」などで「へ」をつかうものがやや多くな

		あがる	帰る	通う	さしこむ	出す	通る	向く	寄る	掛け合う	出入りする	移す	尋ねる	見せる	戻る	訴える	置く	書く	済む	付く	付ける	止まる	流れる	寝る	乗る
坊っちゃん	へ	2	3	1	1	1	4	1	1	1	3	1	2	/											
	に	/									1	1	1											3	5
雁	へ										1	1	1	1	6	3	6	4	2	1	1	2	1	2	/
	に	1	4	2	1	9	1	3	2	/		2	1	1	3	3	1	1	3	9	16	1	6	19	

[表3]

っていることもわかる。表2ほどはっきりはしていないが、ここでも全体に『坊っちゃん』のほうが『雁』よりも「へ」を多く用いているということができる。

3番目に『坊っちゃん』では「へ」か「に」のどちらか一方が使われ、『雁』でその逆の方、「に」(『坊っちゃん』で「へ」)、または「へ」(『坊っちゃん』で「に」)が使われる動詞について調べてみた。その結果は表4のようになった。

		あける	集まる	浴びせる	案内する	写る	埋める	押し付ける	落ちる	下ろす	買う	返す	(めぐら)かく	かけつける	下宿する	辞儀する	敷く	漂う	突き出す	出かける	並べる	握る	乗せる	登る	張る	引き込む	潜む	もたれる	隠す	
坊っちゃん	へ	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	5	1	1	1	1	1	/
	に	/																										1		
雁	へ																											/		
	に	1	1	1	1	2	1	1	4	1	4	1	1	2	1	2	3	1	1	1	1	1	1	3	3	1	2			

[表4]

この表から、『坊っちゃん』が「へ」を使い『雁』が「に」を使うのは26語であるのに対して逆の『坊っちゃん』が「に」を使い『雁』が「へ」を使うのは「隠す」1語であるということがわかる。圧倒的に『坊っちゃん』—「へ」『雁』—「に」の傾向を示している。

主なところは、上の表2～4である。そのほか、2つの山で共通していたものに、『坊っちゃん』または『雁』どちらか一方で「へ」と「に」が使われていたもの、『坊っちゃん』『雁』の両作品に「へ」または「に」のどちらか一方だけが用いられていたものなどがある。しかし、それらは全体の傾向についての関係は深くはなさそうである。以下に数だけ示す。

		歩 下 り る	駈 け 出 す	捨 て る	世 話 す	投 げ る	抜 け 返 す	引 き 返 す	参 る	曲 が る	呼 ぶ	
坊っちゃん	へ	2	2	1	2	1	2	1	2	3	1	1
雁	へ	3	3	1	1	2	1	1	6	1	8	3

〔表5〕

		生 ま れ る	こ も る	な び く	成 る	ま わ す	見 る	越 す	そ ら す	近 寄 る	転 ず る	向 け る		
へ		1	1	1	2	1	1	1	1	14	1	1	1	2
に		1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	2	3

〔表6〕

		与 え る	謝 れ る	現 れ る	至 る	売 る	及 ぼ す	飼 う	掛 か る	隠 れ る	傾 け る	構 う	聞 こ え る	加 え る	答 え る	報 せ る	す め る	住 む	浴 う	相 談 す る	対 す る	立 塞 が る	頼 む	通 じ る	出 会 う	取 ら る	並 ぶ	離 す	向 か う		
坊っちゃん	に	1	1	1	3	1	1	1	1	3	3	1	1	1	1	4	3	1	1	4	1	1	4	1	3	2	2	4	2	13	5
雁	に	2	1	1	3	1	1	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	2	10	1	2	2	2	2	5	2	6	2

〔表7〕

以上、集めた2次カードによる用例数は、『坊っちゃん』の「へ」がのべ373

例、「に」が192例、『雁』の「へ」が189例、「に」が326例ということであった。また両作品中で、「へ」「に」を使う動詞という点では表8のようになる（数字は異なり語数）。

	坊っちゃん	雁
「へ」専用	46	14
「へ」多用	16	11
「へ」と「に」同数	10	6
「に」多用	6	14
「に」専用	34	66
計	112	111

〔表8〕

この表を見ても、『坊っちゃん』が「へ」、『雁』が「に」を多く使う傾向と
いうのははっきりわかる。

4. おわりに

以上、漱石と鷗外の、2つの作品ではあるが違いがはっきりした。しかし、前にも述べたように、これはほんの試験的研究である。この研究ではっきりしたことは、たった2作品であっても手作業で行うとほう大な手間がかかったということである。述べ語数計2203枚のカードも大変であるが（この調査では用例集めは電子計算機に入力されているデータを用いたので労力は大幅に省略できた）、2つの作品で4つの山ができるということは、作品数をふやせば山の数は作品数の2倍になるということである。

将来、作品数をふやして、漱石・鷗外の用法、また他のいろいろな作者の作品（『近代文章における「に」と「へ」の地域差』参照）についても明らかにしたいと思っている。また、音韻的な問題（音韻的に「へ（e）」の出やすい環境、「に（ni）」の出やすい環境ははっきりできそうである）や、上に来る名詞の性格、動詞の意味的な面など、さまざまな点からも分析をしたいとも考えて

いる。

これらの問題を扱うには、電子計算機を用いて分析をしなければ不可能だと思われる。今回の分析方法・結果をもとにして、システムの開発をはかりたいと考えている。